

京都大学若手人材海外派遣事業 スーパージョン万プログラム
研究者派遣プログラム

成果報告書

提出日：平成 27 年 9 月 11 日

1. 渡航者

氏名	谷川 穰	採択年度	2014 年度
部局	文学研究科	電話	
職名	准教授	メール	
研究課題名	明治期日本における教育と宗教の関係についてのトランスナショナル・ヒストリー		
海外渡航期間	2014 年 8 月 6 日～2015 年 3 月 6 日、同 3 月 19 日～7 月 25 日		

2. 渡航に関する情報

渡航先	<p>国名：アメリカ合衆国</p> <p>大学等研究機関名：ハーバード大学</p> <p>研究室名等：ライシャワー日本研究所</p> <p>受入研究者名：Helen Hardacre 教授</p>
<p>渡航期間中の出張</p> <p>(渡航期間中に一時帰国や学会参加等の目的で短期の出張があった場合、その目的、行き先、期間を報告して下さい。)</p> <p>※複数回に渡る場合、適宜行を追加して下さい。</p>	<p>出張先：アマーフト (マサチューセッツ州、アメリカ合衆国)</p> <p>目的：アマーフト大学図書館のアーカイブ・特殊コレクション室にて、上掲課題に関する史料調査を行う。および同大学のトレント・マクシー准教授 (アジア言語・文明/歴史学専攻) と日本近代政治史に関する意見交換を行う</p> <p>期間：2014 年 11 月 16 日～18 日</p> <p>出張先：サンディエゴ (カリフォルニア州、アメリカ合衆国)</p> <p>目的：アメリカ宗教学会年次大会に参加、日本仏教・近代宗教史に関する研究発表へ出席、および宗教学・思想史研究者との意見交換を行う</p> <p>期間：2014 年 11 月 22 日～24 日</p> <p>出張先：ニューヨーク (ニューヨーク州、アメリカ合衆国)</p> <p>目的：アメリカ歴史学会年次大会に参加、日本やアメリカ大陸における近代教育・宗教史に関する研究発表への出席、および日本史研究者との意見交換を行う</p> <p>期間：2015 年 1 月 3 日～5 日</p> <p>出張先：京都 (日本、一時帰国)</p> <p>目的：京都大学とハイデルベルグ大学との共催による、近現代の世界各地域における政教関係を討議するウィンタースクール “What is Caesar’s, what is God’s?” (於・京都大学) に、受入教員として出席する</p> <p>期間：2015 年 3 月 6 日～19 日</p>

	<p>出張先：シカゴ（イリノイ州、アメリカ合衆国） 目的：アメリカアジア学会年次大会に参加、日本・東アジアの近現代史に関する研究発表への出席、および日本宗教史・教育史研究者との意見交換を行う 期間：2015年3月26日～29日</p> <p>出張先：アナーバー（ミシガン州、アメリカ合衆国） 目的：ミシガン大学ベントレー歴史図書館において、上掲課題に関する史料調査を行う。および同大学のマイカ・アワーバック准教授（アジア言語・文化専攻）と日本近代仏教史・思想史に関する意見交換を行う 期間：2015年6月10日～12日</p> <p>出張先：ニューヘイヴン（コネチカット州、アメリカ合衆国） 目的：イエール大学スターリング記念図書館ならびに神学校図書館において、上掲課題に関する史料調査を行う。および同大学のダニエル・ボツマン教授（歴史学専攻）と所蔵史料・日本史研究に関して、ウィリアム・ケリー教授（人類学専攻）と日本社会研究に関して、それぞれ意見交換を行う 期間：2015年6月22日～24日</p> <p>出張先：ニューヨーク（ニューヨーク州、アメリカ合衆国） 目的：コロンビア大学パーク図書館において、上掲課題に関する史料調査を行う 期間：2015年7月14日</p>
--	---

3. ジョン万プログラムによる成果

以下の項目について、渡航期間中の成果、または今後見込まれる成果を具体的にお書き下さい。ページ数については増加してもかまいません。

<p>国際共著論文の執筆 （論文の題名、雑誌名、共著者名、刊行予定等）</p>	<p>歴史学の論文執筆においては共著という形式が一般的ではないこともあり、こうした共著論文の執筆・刊行には至らなかった。もっとも、現在英語を母語とする研究者の編著になる論文集に以下の論文を寄稿中であり、次年度の刊行が予定されている。 'Buddhism and Modern Kyoto', John Breen and Hiroshi Takagi (eds.), <i>Kyoto's modern revolution</i></p>
<p>更なる外部資金獲得に繋がる国際共同研究の立上げ／実施 （国際共同研究の内容、実施計画、応募予定の外部研究資金等）</p>	<p>共同研究が結果的に「更なる外部資金獲得に繋がる」かどうかは、あくまでその進展如何によるものであり、それを目的として行うべき類ではないだろう。もっとも、その可能性に関連して、2014年10月にハーバード大学CGISにおいて開催された日本宗教史・文化遺産に関する国際シンポジウムに参加した。そこで主催した研究者とその継続的開催に向けた意見交換を行い、前近代史中心から日本に一つの軸足を置いた近代宗教史を主題に展開していく方向性について検討した。今後、その実施に向けて検討を重ねていく予定である。</p>

<p>国際研究ネットワーク の新規構築／深化</p> <p>(参加した学会や その他の学術・交流 組織、そこから構築／ 深化した研究ネットワ ークの内容等)</p>	<p>上述のように三つの学会の年次大会へ参加し、発表後の討議などを通じて上掲課題と関わる研究者、かつて刊行した拙著を読み関心を示したという幾人かの研究者とも知り合い、学術的交流を行った。また上述した史料調査先のいくつかの大学でも、掲げた以外の若手日本近代史研究者とも個別に交流を深めることができ、今後の研究連携、および京大への留学生派遣やサバティカルタームにおける滞在を通じた相互の研究交流の継続について意見交換した。一時帰国して参加したウィンタースクールでは、ハイデルベルク大学ほか世界各国の大学院生・若手宗教史研究者と出会い、19・20世紀を通じた世界史的課題として政教関係を見直す研究の方向性を共有しえた。今後彼ら彼女らとの協働による国際ワークショップの開催などが期待されるが、その一端として明治維新150年を期した企画へのコーディネイト・参加を予定している。</p>
<p>在外研究経験 による研鑽</p> <p>(渡航先機関で得た 研究の展開方法、研究 室の運営方法、教育方 針・人材育成方法等)</p>	<p>渡航先機関に所蔵されている史料の広範な調査・収集、図書館での論文執筆を通じて上掲課題に関する英文史料を読み進める一方、同機関で定期的に行われる日本研究の公開研究会へも折々参加した。そこでは研究の途上の様子やこれからのアイデアを切り取って示す、という〈アウトプット〉の比較的「気楽な」あり方を学んだ。自己目的化せぬよう注意は必要だが、手堅く重厚な研究の「完成形」を示すことに追われがちな日本の歴史学においては新鮮で、そうした場を大学院教育において意識的に設ける必要性も感じた。文献へのアクセスや新史料発見の機会の点で以前より大きく進歩した日本史研究だが、かえって日本国内で研究が自足し、また国内史料の整理・量的処理の作業量が増える一方であるという危惧を、在外研究で得た知見から改めて認識しえた。海外の所蔵史料を用いて国内のそれを相対化するメリットもさることながら、自身の研究課題、ひいては自国史を研究すること自体の意味を有形無形に問い直す場としても、大学院生に在学中に短期でも在外研究の経験を得てほしいと身をもって感じた。と同時に、そのための時間的余裕が、京都大学からは失われる一方だと感じられ、それを確保する教育方針・カリキュラムの工夫なども一考の余地があると考えられる。</p>
<p>フィールド研究 の進展</p> <p>(渡航先国で実施した 実地調査や文献調査 等の内容)</p>	<p>当初の課題に直結する史料は、新聞史料を含めて多くはなかった。だが「近代日本」「宗教」「教育」というキーワードを軸に、渡航先機関であるハーバード大学や上述のアメリカ東海岸の諸大学の史料を広く求めていったことで、むしろ、仏教だけでなくキリスト教と教育という主題の広がり、および明治前半期(1860-80年代)だけでなく20世紀に入って以降の日本の教育・宗教政策、と研究の対象・時期を拡大することができた。それを通じて、明治期日本において、教育や宗教をめぐる欧米諸国の目が「圧力」から「後ろ盾」へとシフトしていく様相の諸局面を伺い得た。たとえば、それを媒介することになる在米留学経験者の滞在中の動向を、各大学の総長や教授陣の関係文書に含まれる書簡史料から探った。また、神戸女学院などでキリスト教教育に従事した女性宣教師の記録群、官立中等教育機関に英語教師として滞在した人物の日記、日曜学校の進捗状況を調査した資料など、キリスト教と仏教のそれとの関係が垣間見える史料も調査できた。他方、ハーバード大学所蔵の仏教図像史料コレクションには明治期のものも含まれ、当該期の末寺寺院や信者の信仰のありようの一端を知り得た。</p>